

Title	引用に関する表現の予備研究 : 国際英語によるライティング支援を日指して
Author(s)	浅野, 元子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019 P.5-P.20
Issue Date	2020-07-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/76988
DOI	10.18910/76988
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

引用に関する表現の予備研究: 国際英語によるライティング支援を目指して

浅野 元子

大阪医科大学

E-mail: asanomot@gmail.com

概要 本研究は、日本の大学生や大学院生のライティング支援を目指すプロジェクトの一環である。学術資料の内容を引用する際の言語使用の特徴について、言語教育学分野の専門誌の研究論文緒言部と、国際医学誌に掲載された日本からの研究論文の緒言部を予備的に比較した。緒言部の叙述量に差異が認められたが、投稿規定による語数制限の差によるものと考えられた。引用文献の総数は同等であったが、1,000語当たりの相対頻度は医学系論文のほうが顕著に高かった。テキストでは、双方とも引用文献の著者名を文の要素として組み入れないスタイルが大半を占めたが、引用文献の著者名を文の要素として組み入れる場合に、医学誌において人称代名詞 *we* の使用が高頻度に認められた。本研究でみられた引用表現は、国際誌に受容されていると考えられるが、日本からの医学研究論文緒言部における特徴であるかどうかはさらに精査する必要がある。

キーワード 引用, ライティング国際英語, ESP (English for specific purposes), ジャンル

A pilot study on citation practices in research article introductions: Envisaging pedagogical application for English as an International Language students

Motoko ASANO

Osaka Medical College

Abstract This preliminary study is a part of the project for exploring methods to support discipline-specific writing in English as an international language (EIL). The study examined citation practices in research article introductions published in the international journals in the areas of applied linguistics and medical sciences. Ten research article introductions each were used to analyze how authors incorporate the work of other researchers in their writings. The surface features of the texts were similar between the two disciplines; however, Japanese authors in medical sciences tended to use the plural form of the first

person pronoun in the integral form of citation. Further studies are needed to elucidate whether the findings in this study are applicable to other research article introductions authored by Japanese discipline-specific writers.

Keywords citation, writing, English as an International Language (EIL), English for specific purposes (ESP), genre

1. はじめに

学術のためのライティングについては、「基礎教育科目だけでなく、専門科目の学習を通じた実践的な訓練も行うことが望ましい。」と説かれ (中央教育審議会, 2008, p. 18), とりわけ、英語によるアカデミックライティングの重要性が指摘されて久しい。特に学術研究のための英語指導 “the teaching of research English” (Swales, 1987, p. 41) においては、出典を明示する技能が不可欠であり、「文献を必要に応じて参照すること」 (田地野, 2005, p. 45) が重視される。しかし、参考文献を適切に引用して書くことは、英語を母語としない学生にとって難しいことが報告されており (Abasi, Akbari, & Graves, 2006), 学位論文テキストにおける参考資料の使い方などが研究の対象となっている (Dong, 1996; Thompson, 2001 & 2005; Samraj, 2013)。Dong による研究 (1996) では、学生が参考資料の内容を自身の主張に組み入れることに困難を感じており、教官による指導が重要視されることが示されている。

文献を適切に引用して「参考資料を自身の主張に組み入れること」 “the integration of reference into the argument” は、20 世紀を通じて発達してきたとされる (Bazerman, 1984, p. 175)。研究論文において学術資料を引用するときの言語使用とその役割について研究されてきた (Swales, 1986; Hyland, 1999 & 2000; Arsyad, Zaim, & Susyla, 2018)。学術のためのライティングで文献を引用することを指導すると、「英語母語話者、非母語話者の双方の学生に気づきを得る機会をもたらす」 (Swales, 1990, p. 7) とされる。

研究論文の緒言部における引用の方法について Swales による 1990 年の研究 (p. 148) では、「引用して書いた文の要素として著者名を組み入れる」スタイルの “an integral citation” (以下, Integral Citation とする) と「著者を括弧や文中の肩付き数字などで示す」スタイルの “a non-integral citation” (以下, Non-Integral Citation とする) に分類される。さらに、「報告動詞」 “a reporting verb” を伴うものを “The +R citations” (以下, +R とする), そうでないものを “non-reporting (-R)” (Swales, 1990, p. 150, イタリック体は原著による; 以下, -R とする) に分類している。報告動詞の例として, *show, establish, claim, demonstrate, suggest, examine* (*ibid.*, pp. 150-151) などが挙げら

れ、報告動詞を用いた文は、引用した資料における研究者や知見を紹介する機能を担っているとされる。Swales (1990, p. 149) による例文の一部を以下に記した (以下、特に断りがなければイタリック体による強調は筆者による)。

Integral Citation, +R

(1) *Brie (1988) showed that the moon is made of cheese.*

(2) *The moon's cheesy composition was established by Brie (1988).*

Integral Citation, -R

(3) *Brie's (1988) theory of lunar composition has general support.*

(4) *According to Brie (1988), the moon is made of cheese.*

Non-Integral Citation, +R

(5) *Previous research has shown that the moon is made of cheese (Brie, 1988).*

(6) *It has been established that the moon is made of cheese.¹⁻³*

Non-Integral Citation, -R

(7) *The moon is probably made of cheese (Brie, 1988).*

(8) *The moon may be made of cheese.¹⁻³*

引用表現の使用について、先行研究 (Hyland, 1999) では、言語教育学などの応用言語学、社会学、マーケティング、哲学、生物学、電気工学、機械工学、物理学という8種類の分野の研究論文各10報、合計80報をSwales (1990) の方法に従って分類している。Hylandの研究 (1990) によると、社会学や哲学などの人文社会学系の研究論文において、物理学や機械工学などの科学技術系に比べて資料を引用する頻度が高く、1,000語当たりに標準化した割合も顕著に高い。また、引用文献の著者名を文の要素として組み入れた Integral Citation は、人文科学系に多く、科学技術系では少ないことが示されている。「人文科学では、先行研究を引用することの果たす役割が、より明確に可視化されている」(Hyland, 1999, p. 352) と説明される。

理系分野での Integral Citation の使用頻度については、英語で書かれた英国およびインドネシアの医学研究論文の緒言部における引用のスタイルを調査した研究 (Arsyad et al., 2018) においても顕著に低いことが報告されている。この研究 (Arsyad et al., 2018) では、医学分野の国際誌 *British Medical Journal* とインドネシアの医学誌 *Acta Medica Indonesiana* に掲載された英語による研究論文各 20 報の緒言部が対象であった。¹

本研究では、これらの先行研究を踏まえて、日本の大学生や大学院生にとってモデルとなり得る引用表現について探索するための予備的検討を行った。国際誌に掲載された日本人著者による研究論文における引用表現について、Hyland による 1999 年の研究において対象とされた言語教育分野の専門誌 *Tesol Quarterly* 誌と比較した。²

2. コーパスと方法

理系のための学術英文モデルのコーパス研究プロジェクトのコーパスより、国際医学誌 *The New England Journal of Medicine* に掲載された日本からの研究論文のうちの 10 報を無作為に抽出して用いた。そして、言語教育学誌 *Tesol Quarterly* のウェブサイトより、研究論文 10 報を無作為にダウンロードしてコーパス化した。同誌の投稿規定によると、研究論文の語数は、参考文献、注釈、表を含めて 7,000~8,500 語までという制限があるが、参考文献の数については特に制限されていない (*Tesol Quarterly*, 2020)。一方、医学誌では、最大で 2,700 語とされ、構成要素としては、抄録、図または表を 5 点まで、参考文献は 40 件までと定められている (*The New England Journal of Medicine*, 2020)。テキストの総語数は、言語教育学誌の論文では平均 8,850 語 (標準偏差は 1,410)、医学誌の論文では 2,940 語 (標準偏差は 413) であり、約 3 倍の違いが認められたが、投稿規定に準拠したものと推察された。³

緒言部の語彙プロファイルを調査した。引用表現に関しては、Integral Citation, Non-Integral Citation に分類した後に、「報告動詞」(Swales, 1990, p. 148) を伴うもの (+R) と、そうでないもの (-R) に分類した。引用した学術資料の提示方法、および報告動詞の高頻度語を目視で精査した。

語彙プロファイルの調査には CasualConc (Version 2.1.5; Imao, 2019) を用いた。引用表現の分類には、Microsoft Excel 2019 (Version 16.0.12827.20200) を使用した。

3. 語彙プロファイル

緒言部の総語数は、言語教育学誌では 5,600 語、医学誌では 3,030 語であり、異なり語数は、言語教育学誌では 1,576 語、医学誌では 949 語であり分布に明らかな差が認められた (図 1)。⁴

総語数の平均は、言語教育学誌で 560 語 (標準偏差は 253 語), 医学誌では 303 語 (標準偏差は 99 語) であり, フリーソフト R を用いた Welch の t 検定により統計学的有意差が認められた ($p=.01$, 図 1)。また, 緒言部の語数が論文テキスト全体に占める割合は, 言語教育学誌が 6.3%, 医学誌が 11.2%であった。

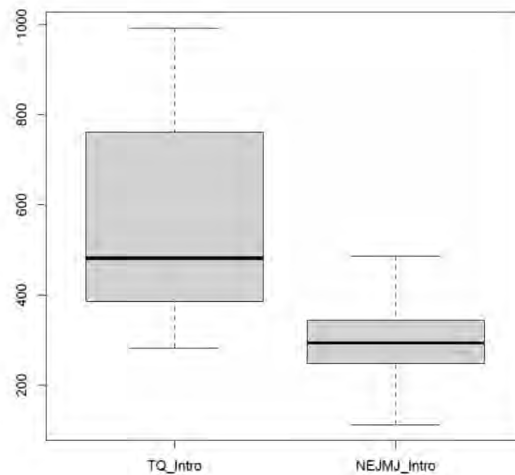


図 1. 言語教育学誌 (TQ) と医学誌 (NEJM) の緒言部の総語数の分布: R による Boxplot

緒言部の高頻度語を表 1 に示した。言語教育学誌では, 1 位に *the*, 2 位に *of* が布置したが, 医学誌では 1 位に *of*, 2 位に *the* が現れた。医学誌では, *a phase 2 study of (NEJM6)*, *the abrupt onset of symptoms of (NEJM1) with massive infiltration and accumulation of (NEJM2)* などが認められ, 「名詞化構造 “nominalization structure” を用いると複雑で情報に富む発語を簡潔に記すことができる」 (Hanauer & Englander, 2013, p. 35) ことを示唆するものと考えられた。CasualConc によるコンコーダンを図 2 に示した。

また, 言語教育学誌では 9 位に *teachers*, 12 位に *language*, 14 位に *learning*, 17 位に *English*, *teacher* が出現し, 医学誌では 9 位に *patients*, 11 位に *cancer*, 16 位に *cell*, 17 位に *gastric* が出現し, 専門分野の頻出語彙と考えられた。なお, 言語教育学誌において 19 位の 1 をコンコーダンスラインで調査すると, *first language* の略語として *L1*, *second language* の略語として *L2* の使用が多かった。

表 1. 緒言部における頻度上位 20 語

TQ	Words	粗頻度	相対頻度 [†]	NEJMJ	Words	粗頻度	相対頻度 [†]
1	the	232	41.4	1	of	157	51.8
2	of	212	37.9	2	the	149	49.2
3	in	178	31.8	3	in	88	29.0
4	and	167	29.8	4	and	78	25.7
5	to	157	28.0	5	a	63	20.8
6	a	100	17.9	6	with	61	20.1
7	for	61	10.9	7	to	52	17.2
8	is	55	9.8	8	is	37	12.2
9	teachers	51	9.1	9	patients	34	11.2
10	as	48	8.6	10	by	27	8.9
11	that	47	8.4	11	cancer	26	8.6
12	language	45	8.0	12	for	24	7.9
13	with	42	7.5	13	have	22	7.3
14	learning	41	7.3	13	that	22	7.3
14	this	41	7.3	15	or	21	6.9
16	on	38	6.8	16	cell	20	6.6
17	English	37	6.6	17	gastric	18	5.9
17	teacher	37	6.6	18	we	17	5.6
19	I	30	5.4	19	are	16	5.3
20	are	29	5.2	19	as	16	5.3

[†]1000 語当たりの相対頻度

of the renin - angiotensin system and increased production of its main active peptide , angiotensin
 In a study of Japanese persons in Hawaii , 12 the
 soms of hyperglycemia and who were prone to the development of Ketoacidosis , as is characteristic of
 leath in the Western world and markedly impairs the quality of life by causing heart failure or
 e spinal cord , with massive infiltration and accumulation of lymphocytes.⁸
 re oxygen species such as superoxide through the activation of membrane - bound NADH or NADPH oxidase.²
 report of a patient in whom the intrathecal administration of methylprednisolone acetate provided com
 ic cancer - a result that is inconsistent with the findings of most case - control studies .
 pylori 10,11 may have false negative results , and the use of multiple tests may help to provide a
 In general , the incidence of myocardial infarction increases
 itself is partly under genetic control , a family history of myocardial infarction is also an
 cholesterol - ester transfer protein , 7 increase the risk of myocardial infarction , the results of
 This type of neuralgia is typically accompanied by

図 2. 医学誌の緒言部での of の使用例: CasualConc によるコンコーダンスライン

4. 引用文献の数

緒言部における引用文献について、総数は、言語教育学誌が 147 件、医学誌が 145 件で、差異は認められなかった。しかし、1,000 語当たりの引用文献数は、言語教育学誌では 26.3 件、医学誌では 47.5 件であり、医学誌において顕著に多くの資料が使用されていた (表 2)。

表 2. 緒言部における引用文献数⁵

	平均件数	1000 語当たりの件数	総件数
言語教育学誌	14.7	26.3	147
医学誌	14.5	47.5	145

引用の形式については、言語教育学誌も医学誌も大半が、引用文献の著者を本文に組み入れないで括弧や文中の肩付き数字などで示すスタイル (Non-Integral Citation) であった。

5. 引用のスタイル

言語教育学誌と医学誌において、引用した資料の著者を括弧や文中の肩付き数字などで示すスタイル (Non-Integral Citation) に報告動詞を伴うもの (+R, 例 9, 10) と伴わないもの (-R, 例 11, 12), 引用した資料の著者を文の要素として組み入れるスタイル (Integral Citation) に報告動詞を伴うもの (+R, 例 13, 14) と伴わないもの (-R, 例 15) の例を挙げた。Integral Citation で報告動詞を伴わないもの (-R) は、言語教育学誌において 1 件のみ認められ、医学誌には出現しなかった (表 3)。

表 3. 引用のスタイル

	Non-integral [†]	+R [‡]	-R [‡]	Integral [†]	+R [*]	-R [*]
言語教育学誌	138 (94%)	57 (41%)	81 (59%)	9 (6%)	8 (89%)	1 (11%)
医学誌	135 (93%)	48 (33%)	97 (67%)	10 (7%)	10 (100%)	0 (0%)

[†]Non-integral と Integral の粗頻度と割合 (%)

[‡]Non-integral, +R と Non-integral, -R の粗頻度と割合 (%)

^{*}Integral, +R と Integral, -R の粗頻度と割合 (%)

Non-Integral Citation, +R

(9) Mainstream classrooms in the United States *are considered* inclusive settings, where students from diverse backgrounds such as ELs, students with learning disabilities, and gifted and talented students are taught together in one

setting (Coady, Harper, & de Jong, 2016).

(TQ8)

(10) Because high serum IgG4 concentrations *are found* in only a limited number of conditions, such as atopic dermatitis,¹⁷ some parasitic diseases,¹⁸ and pemphigus vulgaris and pemphigus foliaceus,¹⁹ we sought to determine whether serum IgG4 concentrations are high in patients with sclerosing pancreatitis but not in patients with other diseases of the pancreas or biliary tract.

(NEJMJ4)

Non-Integral Citation, -R

(11) In recent years, virtual exchange has become an important part of online approaches to international education (De Wit, 2016; Lewis & O’Dowd, 2016).

(TQ9)

(12) In a variety of animal models, the administration of green-tea extracts or polyphenols inhibits tumorigenesis in several organs, including the stomach.^{2,3}

(NEJMJ3)

Integral Citation, +R

(13) *Dang and Webb (2014) found* that academic speech from life and medical sciences is more challenging in terms of vocabulary than academic speech from arts or humanities, physical sciences, and social sciences; that is, to achieve reasonable comprehension of academic lectures and seminars, learners would need a larger vocabulary size in the case of life and medical sciences (5,000 word families) than in the case of other disciplines (3,000–4,000 word families).

(TQ4)

(14) *The American Diabetes Association and the World Health Organization have proposed that type 1 diabetes be subdivided into autoimmune (immune-mediated) diabetes (type 1A) and idiopathic diabetes with beta-cell destruction (type 1B).*^{10,11}

(NEJM1)

Integral Citation, –R

(15) *According to Bui and Nguyen (2016), there has been increasing demand for English from various social and professional groups throughout Vietnam.*

(TQ9)

6. 引用した資料の提示方法

引用した資料の提示の方法について、Hyland の 1990 年の研究 (p. 348) に従い、「短い直接引用」“short direct quotes”, 「ブロック引用」“indented blocks”, 資料の「要約」“summary”, 「一般化」“generalization” の 4 種類に分類することを試みた。資料の要約については、「一つの出典を要約したもの」“summary from a single source” (Hyland, 1999, p. 348) , 一般化については、「複数の著者に帰するもの」“material is ascribed to two or more authors” と説明される (Hyland, 1999, p. 348)。

一般化に関しては、Swales (1990, p. 152) が、Oster による 1981 年の研究を引用して、「現在完了」が「トピックの一般化」“topic generalizations” の際に用いられることが多いことに言及している。Oster (1981, p. 77) は、「技術系の論文からの例文」“excerpts taken from ...technical articles” を挙げて論じている。そして、そのうちの一つの緒言部の最初の文において *have been observed* が「oscillations の 中心的な考え方を紹介している」“introducing the core idea of oscillations” ことに言及して、「過去の資料について一般化する際に現在完了時制が使われる」と説明している (Oster, 1981, p. 83)。

Sustained isothermal, concentration oscillations *have been observed* in recent experimental studies involving the oxidation of either CO or H₂ over metal catalysts [1-9].

(Oster, 1981, p. 78, イタリック体は原著による)

Swales (1990, p. 153) は、さらに、Malcolm による 1987 年の研究を引用して「(動作主が先行研究の著者ではない場合に) 現在時制が使用される傾向がある ([Malcolm の] サンプルング資料では 74%に認められた)」と言及している。これらの記述を参考に、データを精査した。

本研究では、ブロック引用は認められず、直接引用は言語教育学誌のみに 5 件出現した。このような傾向は、先行研究 (Hyland, 1999, p. 348) における「直接引用は最低限であり、科学系の論文には出現しなかった」という結果に類似している。要約と一般化についても、先行研究に類似した傾向が認められた。これらの例を以下に挙げた。

表 4. 引用した先行文献の提示方法

	Quote	Block quote	Summary	Generalization
言語教育学誌	5	0	112	30
医学誌	0	0	128	17
粗頻度				

Summary

(17) Native speakerism is an ideology positing that native speakers provide the best models of the target language and for this reason make the best teachers of the language (e.g., Holliday, 2005; Pennycook, 1994).

(TQ6)

(18) A higher risk of the development of gastric cancer has been reported in subjects with positive serologic tests for H. pylori.²⁻⁴

(NEJMJ5)

Generalization

(19) First, *there are* limits to how much vocabulary can be explicitly taught and learned in the classroom (Webb & Nation, 2017).

(TQ4)

(20) *In general*, the incidence of myocardial infarction increases additively as a function of the number of conventional risk factors, including hypertension, diabetes mellitus, and hypercholesterolemia.²

(NEJM6)

例文 19 については、現在時制を用いて書かれており、語彙指導に関する一般論ではないかと推察された。例文 20 については、緒言の最初のパラグラフに *In general* と記して現在時制を使用しているため、引用文献の内容を一般化して記述した例であることが示唆された。

7. 引用における報告動詞の使用

また、報告動詞の出現頻度を目視で調査したところ、言語教育学誌では、*find*, *suggested*, *used*, *suggest*, *criticised* が 2 回以上出現した。先行研究 (Hyland, 1999) では、*use* は電子工学の頻出語彙に挙げられている。言語教育学においても、下記の例のように、引用文献の内容を要約して記述する際に出現する場合がありますと考えられた。

(21) With focused instruction, L2 speakers tend to *use more formulaic sequences*, and their speech fluency improves over time (Boers, Brussels, Kappel, Stenfers, & Demecheleer, 2006; Serrano, Stengers, & Housen, 2015; Wood, 2009).

(TQ1)

医学誌では *reported* が 4 回、*find* と *reveal* が 2 回ずつ出現した。本研究の二つのコーパスにおける報告動詞に関して、語彙の豊かさに差異がある可能性が示唆される。

(22) A higher risk of the development of gastric cancer *has been reported* in subjects with positive serologic tests for *H. pylori*.²⁻⁴

(NEJM5)

また、文の要素に著者を組み入れた引用 (Integral Citation) では、1 件を除いてすべて報告動詞を伴っていた (例文 13-15)。言語教育学誌では、いずれも、他の研究者による研究に言及していたが、医学誌では著者自身の研究に言及するものが大半を占めていた。

(23) In a small, preliminary study, we found that epidural methylprednisolone helped alleviate postherpetic neuralgia.⁷

(NEJM2)

8. 考察

国際誌に掲載された日本からの医学分野の研究論文緒言部における引用表現について、言語教育学誌の研究論文緒言部と比較した。緒言部の総語数は、言語教育学誌では平均 560 語、医学誌では 303 語であった。総語数の差については、投稿規定による語数制限の違いに起因するものと考えられた。二つの学術誌において、学術資料を引用する際の言語使用については、おおむね類似した特徴が認められた。しかし、引用文献の著者名を文の要素として組み入れる場合に、医学誌において人称代名詞 *we* を用いる例が多かった。

引用文献数は、言語教育学誌では平均 14.7 件、医学誌では 14.5 件であった。インドネシアの研究 (Arsyad et al, 2018) では、英国の国際誌の緒言部における総語数は平均 450 語、引用文献の数は 14.1 件であり、インドネシア国内誌の総語数は平均 340 語、引用文献の数は 10.2 件であった。引用文献数については先行研究の結果と類似していると考えられたが、1,000 語当たりの引用頻度は、本研究の対象とした医学誌において、高い傾向が認められた。先行研究において分子生物学分野の論文における引用数が著明に多いことについて、理由は不明であると記されている (Hyland, 1999)。本研究における結果について、日本からの研究論文緒言部の特徴かどうかは、今後さらに検討する必要がある。

いずれの学術誌においても、引用した研究の著者を組み入れないスタイル (Non-Integral Citation) で、引用した研究を要約して提示することが多いことが示唆された。Hyland (1999) の研究で、Integral Citation が人文科学系に多く認められたことを踏まえると、「[19 世紀後半から 20 世紀後半にかけて] ‘Smith reports...’ のように[先行研究の著者に言及して]報告動詞を用いる書き方が減り ‘temperature increases...’ のような “active verbs” を用いる書き方が増えており、知見や理論

が中心的な位置に置かれるようになっていることを示唆している」(Bazerman, 1984, p. 177) という傾向がさらに進展しているのではないかと推察される。

しかし、引用した研究の著者を緒言部の文章に組み入れる場合に、言語教育学誌では、すべて他の研究者による研究に言及するものであったのに対して、医学誌では、人称代名詞 *we* を用いて著者自身の研究に言及する例が大半を占めていた。先行研究の著者を緒言部の文章に組み入れるスタイルは、引用文献の著者が、文献に書かれた情報より重要と考えた場合に用いられるとされる (Hyland, 1999; Swales, 1990; Arsyad et al., 2018)。また、「著者自身の研究を引用すること」“self-citation” については「意見が分かれる」“controversial” (Feak & Swales, 2012, p. 341) と説かれる。この結果についても、引き続き調査を続けたい。

引用した学術資料の提示方法については、先行研究を参考に、報告動詞の分類を行ったが、引用文献番号が文中のどの記述をサポートするものであるかを判断するのが難しい例が散見された。

(25) *It has been hypothesized to have a protective effect against the development of gastric cancer, the second leading cause of death from cancer throughout the world.*¹

(NEJM3)

この例文の場合、肩付き数字で示された資料のタイトルは、*Estimates of the worldwide mortality from eighteen major cancers in 1985: implications for prevention and projections of future burden* であったため、文の後半の記述を支持するものと推し量られた。

また、引用した学術資料の提示方法の分類は困難な場合が多く、可能であれば著者にインタビューを行うなどの質的な調査を行うことが望ましいと考えられた。言語的特徴からの類推にとどまるが、先述した Oster (1981) の研究において、先行文献の内容を一般化しているとされる例文が技術系論文緒言部の最初に布置されていたように、前後の文脈、とりわけ、緒言部のどの部分に布置しているかという情報は重要な手がかりとなった。緒言部のムーブ分析 (Swales, 1981, 1990) を行くと、分類の難しさが減じる可能性が示唆される。また、結果として、先行研究を要約した記述の比率が高いことが判明した。本研究は予備的な検討であるが、この知見は、他の研究者による研究を要約する技能の重要性を示唆するものである可能性がある。これは、工学系学術誌において

近田・西村・Majumder (2019, p. 40) が、引用して書くことの重要性を説明し、「他者の論文を自分の言葉で言い換えて使用」することを「パラフレーズ」と定義して紹介しているように、理系研究者よるライティングにおいて、教育的意義を有するものであろう。

本研究の対象とした言語教育学誌と医学誌では、学術資料を引用する際の言語使用に類似した特徴が認められたが、医学誌では、緒言部の文の要素として引用文献の著者名を組み入れる場合に人称代名詞 *we* が多く使用されていた。これについては、追研究を行い、日本人著者による医学系論文緒言部での言語使用の特徴であるかどうかをさらに調査する必要がある。

謝辞

本研究を実施するに際して、大阪大学の田畑智司先生には、本プロジェクトに加えていただき、本稿の以前の原稿を発表する機会をいただき、貴重なご指導をいただいた。今尾康裕先生には、本稿の以前の原稿およびコーパス・ツールについて詳しくご指導いただいた。岩根久先生、三宅真紀先生、ホドシチェク ボル先生、からは、温かいお励ましと助言をいただいた。日野信行先生からは、本研究の基礎になる考え方をご指導いただいた。ここに記して感謝申し上げたい。なお、本稿における誤記は、すべて筆者によるものである。

¹ インドネシアの研究 (Arsyad et al., 2018, p. 35) では、英国の国際医学誌 *British Medical Journal* は「国際的な著者」“international writers”により執筆され、「英語母語話者によって編集および校閲される」とされる一方、インドネシアの医学誌 *Acta Medica Indonesiana* については、「著者、査読者、編集者がインドネシア語を母語とし、外国語としての英語使用者あるいは非母語話者である」と述べられている。このことに言及した上で、「執筆者が英語母語話者と非母語話者による違いではなく、医学分野の国内誌と国際誌における差異」を比較検討したと記されている (*ibid.*, p. 35)。

² 英語使用者を定義することについては、国籍という伝統的な枠組みを用いることには限界があるとされる (日野, 2008, p. 16)。しかし、インドネシアの研究 (Arsyad et al, 2018) において Connor, Nagelhout, および Rozycki による 2008 年の研究に言及して説かれるように、“Intercultural analysis”は、「さまざまな言語的背景を有する学生を対象とする学術のための英語の授業において特に有用」と考えられている (Connor, 2004, p. 299)。本稿ではそのような背景を踏まえて、医学研究論文における語彙研究 (Chen & Ge, 2007) や通時的研究 (Li & Ge, 2008) と同様に、Wood (2001) の考え方に従い、日本人らしい名前を有し、日本の施設に所属する第一著者を日本人著者とした。

³ 論文テキストとして抄録、緒言、方法、結果、考察、結論などのセクションを使用した。

⁴ CasualConc (Imao, 2019) による語彙プロファイルの出力結果は要求に応じて開示可能。

⁵ 以下、引用表現に関する計量は、Hyland (1999, pp. 346–348) による表の記述を参考にした。

文 献

- Abasi, A. R., Akbari, N., & Graves, B. (2006). Discourse appropriation, construction of identities, and the complex issue of plagiarism: ESL students writing in graduate school. *Journal of Second Language Writing*, 15, 102–117.
- Arsyad, S., Zaim, M., and Susyla, D. (2018). Review and citation style in research article introductions: A comparative study between national and international English-medium journals in medical sciences. *Discourse and Interaction*, 11/1, 28–51.
- Bazerman, C. (1984). Modern Evolution of the Experimental Report in Physics: Spectroscopic Articles in Physical Review, 1893-1980. *Social Studies of Science*, 14(2), 163–196.
- Imao, Y. (2019). CasualConc (Version 2.1.5) [Computer Software]. Osaka, Japan: Osaka University. Available from <https://sites.google.com/site/casualconc/>
- Connor, U. (2004). Intercultural rhetoric research: beyond texts. *English for Specific Purposes*, 3, 291–304.
- Chen, Q. & Ge, G. (2007). A corpus-based lexical study on frequency and distribution of Coxhead's AWL word families in medical research articles (Ras). *English for Specific Purposes*, 26, 502–514.
- Connor, U., Nagelhout E. and Rozycki W. V. (2008) 'Introduction.' In: Connor, U., Nagelhout, E. and Rozycki, W. V. (eds) *Contrastive Rhetoric: Reaching to Intercultural Rhetoric*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 1–8.
- Dong, Y. R. (1996). Learning how to use citations for knowledge transformation: non- native doctoral students' dissertation writing in science. *Research in the Teaching of Writing*, 30, 428–457.
- Englander, K. (2013). *Writing and Publishing Science Research Papers in English: A Global Perspective*. London: Springer.
- Feak, C. B., & Swales, J M. (2012). *Academic writing for graduate students, Essential tasks and skills*. 3rd ed. MI, USA: University of Michigan Press.
- Hyland, K. (1999). Academic attribution: Citation and the construction of disciplinary knowledge. *Applied Linguistics*, 20(3), 341–367.
- Hyland, K. (2000). *Disciplinary discourses: Social interactions in academic writing*. England: Pearson.
- Li, L., & Ge, G. (2009). Genre analysis: Structural and linguistic evolution of the English-medium medical research article (1985 – 2004). *English for Specific Purposes*, 28(2), 93–104.
- Malcolm, L. (1987). Wat rules govern tense usage in scientific article? *English for Specific Purposes*, 6, 31–44.
- Oster, S. (1981). The use of tenses in “reporting past literature” in EST. In Selinker, Tarone, & Hanzeli (eds.): *English for academic and technical purposes: Studies in honor of Louis Timble*. 76–90.
- Samraj, B. (2013). Form and function of citations in discussion sections of master's theses and research articles. *Journal of English for Academic Purposes*, 12, 299–310.
- Swales, J. (1981). *Aspects of article introductions*. Birmingham, UK: The Language Studies Unit, Aston University.
- Swales, J. (1986). Citation analysis and discourse analysis. *Applied Linguistics*, 7, 39–56.
- Swales, J. (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tesol Quarterly. (2020). TESOL Quarterly Submission Guidelines. Retrieved from <https://onlinelibrary.wiley.com/page/journal/15457249/homepage/ForAuthors.html> on June 20, 2020.
- The New England Journal of Medicine. (2020). Article Types in Author Center. Retrieved from <https://www.nejm.org/author-center/article-types> on June 22, 2020.
- Thompson, P. (2001). *A pedagogically-motivated corpus-based examination of Ph.D. theses: Macrostructure, citation practices and uses of modal verbs*. Unpublished Ph.D. thesis, University of Reading. Retrieved from: paulslals.org.uk/thesis.pdf on June 20, 2020.
- Thompson, P. (2005). Points of focus and position: intertextual reference in Ph.D. theses. *Journal of English for Academic Purposes*, 4, 307–323.
- Thompson, P., & Tribble, C. (2001). Looking at citations: using corpora in English for academic purposes. *Language Learning and Technology*, 5, 91–105.
- Wood, A. (2001). International scientific English: The language of research scientists around the world. In J. Flowerdew & M. Peacock (eds.), *Research perspectives on English for academic purposes*. pp. 71–83. Cambridge: Cambridge University Press.
- 近田レイラ, 西村 美里, Kakoli Majumder. (2019)「あわや剽窃行為？引用と参考文献にはご注意を」日本機械学会誌第 122 巻第 1211 号 pp. 40-41. DOI: https://doi.org/10.1299/jsmemag.122.1211_40

菅谷奈津恵「大学の教養科目におけるレポート指導の効果:一引用の習得を中心に」日本語教育方法研究会誌 24(1), 78-79, 2017

田地野彰 (2005). 「一般学術目的の英語 (EGAP) のコース設計に向けて」MM News No. 8

中央教育審議会 (2008). 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf on June 12, 2020.

日野信行 (2008). 「国際英語」小寺茂明, 吉田晴世 (編)『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』第2章 (pp. 15-32) 松柏社

Appendix: 参考資料

- TQ1 Yan, X. (2019). Unpacking the relationship between formulaic sequences and speech fluency on elicited imitation tasks: Proficiency level, sentence length, and fluency dimensions. *Tesol Quarterly*, 54(2), 460-487.
- TQ2 Nguyen, C. D., & Dang t. C.T. (2019). Second language teacher education in response to local needs: Preservice teachers of English learning to teach diverse learners in communities. *Tesol Quarterly*, 54(2), 404-435.
- TQ3 Galloway, N., & Numajiri, T. (2019). Global Englishes language teaching: Bottom-up curriculum implementation. *Tesol Quarterly*, 54(1), 118-145.
- TQ4 Dang, T. N. Y. (2019). The potential for learning specialized vocabulary of university lectures and seminars through watching discipline-related TV programs: Insights from medical corpora. *Tesol Quarterly*, 54(2), 436-459.
- TQ5 Chen, J. C. (2019). Restorying a “Newbie” teacher’s 3D virtual teaching trajectory, resilience, and professional development through action research: A narrative case study. *Tesol Quarterly*, 54(2), 375-403.
- TQ6 Copland, F., Mann, S., & Garton, S. (2019). Native-English-Speaking teachers: Disconnections between theory, research, and practice. *Tesol Quarterly*, 54(2), 348-374.
- TQ7 Britsch, S. (2019). “Nosotras no empezamos a hacer eso”: A social semiotic view of a sheltered science investigation. *Tesol Quarterly*, 54(2), 310-347.
- TQ8 Coady, M., Miller, M. D., Jing, Z., Heffington, D., Lopez, M., Olszewska A., De Jong, E., Yilmaz T., & Ankeny, R. (2019). Can English learner teacher effectiveness be observed? validation of an EL-modified framework for teaching. *Tesol Quarterly*, 54(1), 173-200.
- TQ9 O’Dowd, R., Sauro, S., Spector-Cohen, E. (2019). The role of pedagogical mentoring in virtual exchange. *Tesol Quarterly*, 54(1), 146-172.
- TQ10 Youn, S. J. (2019). Interactional features of L2 pragmatic interaction in role-play speaking assessment. *Tesol Quarterly*, 54(1), 201-233.
- NEJMJ1 Imagawa, A., Hanafusa, T., Miyagawa, J., Matsuzawa, Y., for the Osaka IDDM Study Group. (2000). A novel subtype of type 1 diabetes mellitus. *The New England Journal of Medicine*, 342(24), 1835-1837.
- NEJMJ2 Kotani, N., Kushikawa, T., Hashimoto, H., Kimura, F., Muraoka, M., Yodono, M., ... Matsuki, A. (2000). Intrathecal methylprednisolone for intractable postherpetic neuralgia. *The New England Journal of Medicine*, 343(21), 1514-1519.
- NEJMJ3 Tsubono, Y., Nishino, Y., Komatsu, S., Hsieh, C. C., Kanemura, S., Tsuji, I., ... Hisamichi, S. (2001). Green tea and the risk of gastric cancer in Japan. *The New England Journal of Medicine*, 344(9), 632-636.
- NEJMJ4 Hamano, H., Kawa, S., Horiuchi, A., Unno, H., Furuya, N., Akamatsu, T., ... Kiyosawa, K. (2001). High serum IgG4 concentrations in patients iwth sclerosing pancreatitis. *The New England Journal of Medicine*, 344(10), 732-738.
- NEJMJ5 Uemura, N., Okamoto, S., Yamamoto, S., Matsumura, N., Yamaguchi, S., Yamakido, M., ...Schilemper, R. J. Helicobacter pylori infection and the development of gastric cancer. *The New England Journal of Medicine*, 345(11), 784-789.
- NEJMJ6 Noda, K., Nishiwaki, Y., Kawahara, M., Negoro, S., Sugiura, T., Yokoyama, A., ... Saijo, N. for the Japan Clinical Oncology Group. (2002). Irinotecan plus cisplatin compared with etoposide plus cisplatin for extensive small-cell lung cancer. *The New England Journal of Medicine*, 346(2), 85-91.
- NEJMJ7 Higashi, Y., Sasaki, S., Nakagawa, K., Matsuura, H., Oshima, T., & Chayama, K. (2002). Endothelial function and oxidative stress in renovascular hypertension. *The New England Journal of Medicine*, 346(25), 1954-1962.
- NEJMJ8 Yamada, Y., Izawa, H., Ichihara, S., Takatsu, F., Ishihara, H., Hirayama, H., ... Yokota, M. (2002). Prediction of the risk of myocardial infarction from polymorphisms in candidate genes. *The New England Journal of Medicine*. 347(24), 1916-1923.
- NEJMJ9 Kato, H., Ichinose, Y., Ohta, M., Hata, E., Tsubota, N., Tada, H., ...Ohta, M., for the Japan Lung Cancer Research Group on Postsurgical Adjuvant Chemotherapy. (2004). *The New England Journal of Medicine*. 350(17), 1713-1721.
- NEJMJ10 Nishida, K., Yamato, M., Hayashida, Y., Watanabe, K., Yamamoto, K., Adachi, E., ...Tano, Y. (2004). Corneal reconstruction with tissue-engineered cell sheets composed of autologous oral mucosal epithelium. *The New England Journal of Medicine*. 351(12), 1187-1196.